

## 「ご縁」

海原会会員

富澤奈津子

(山形県上山市在住)

長野県出身、乙種海軍飛行予科練習生(以下「乙飛」と記述)六期、山岸昌司さんと、山形県在住の私の「ご縁」は、実際の地理的距離以上に遠い遠いものでした。

私は先の大戦で戦われた海軍航空隊員の方々にについて調べ、その肖像画を描き残すということとをライフワークにしています。これは自分なりにできる慰霊であり、日本人にもう一度彼らを思い出してほしいという気持ちからです。

その一人として、山形県出身で「南太平洋海戦」で戦死された甲種飛行予科練習生(以下「甲飛」と記述)四期、安部晃さん(空母「翔鶴」雷撃隊、電信員)を調べていく過程で、同じく「翔鶴」雷撃隊員であられた山岸さんを知ることとなりました。

ある年、初めて参列した筑波

海軍航空隊(以下「筑波空」と記述)慰霊祭の日、筑波空記念館に展示された山岸さんのパネルの前で、偶然姪御さんの平林峰子さんと出会いました。どうやら、山岸さんは、中国での戦いのあと本土へと戻り、筑波空に教員として在籍されていたため筑波空に「ご縁」があり、姪の平林さんが慰霊祭に出席していたのです。



平成30年筑波空慰霊祭

この日は、「翔鶴」雷撃隊を日々追っていた私にとって、偶然とは思えないほど衝撃的「ご縁」の日となりました。

後日、山岸さんの故郷である長野県大町市を訪ね、平林さんのご厚意でお墓参りもさせていただきました。山岸さんのお墓は大町の山里にあり、二回のお墓参りは、平林さんも私も、熊や猪やら出たら怖い怖いと大騒ぎでした。(笑)



そのころ平林さんは、山岸さんとペアで戦死された偵察員(児玉清三さん)と電信員(村上守司さん)のお二人のことをどうしても知りたくて願っていたのでした。

たまたま私が山形県在住であったことで同郷の、偵察員であった甲飛三期、児玉清三さんの

行方を知ることになりました。

しかし、児玉さんの手掛かりを掴んだのは残念ながら、児玉さんを知る唯一のご親族が亡くなった直後のことであり、お話をうかがうことはできませんでした。そのことは今でも悔やまれます。

ちなみに児玉さんは、私が元々調べていた安部晃さんとずっとペアであったこともわかり、これもまた不思議な「ご縁」だと思わざるを得ません。

電信員の、乙飛九期の村上守司さんに関しては、平林さんの知人である乙飛九期について専門的に調査研究されている奈良県在住の女性から、とても貴重な情報もたらされました。それによると、村上さんも山岸さんと同じ長野県出身であり、それもまた何かの「ご縁」のように感じました。

平林さんとお付き合ひする中で、「叔父さんに会いたい、近づきたい」という願いは、平林さんにとつての執念のように思えてなりませんでした。

後日、茨城県にお住いの研究

者、飛田伸二さんをご紹介いただきまして、山岸さんの最期も、安部晃さんの最期も知ることができました。

お二人の最期を知ったとき、もうすでにここにはいない安部さんや山岸さんを思うと涙が止まりませんでした。

もう一度日本人に彼らを思い出してほしい、知ってほしいという思いで今日までやってきた私には、彼らはいとも隣にいます。大切に大きな存在でした。

十分：彼らはもういないとわかっていったのに・・・  
ですがここで終わりではありません。彼らの生きた証を、そして最期の様子を、私も見つめたいという気持ちは色褪せることはありませんでした。

最初に戻りますが、私が行っていること、それは彼らが遺された写真や思い出、お人柄からその方を絵に遺すことです。やっとなりし日の山岸さんを描き遺すことができました。

山岸さんを知ってからの数年分の想いを籠めました。できうるならば、まだ知りえなかった

ころの分も籠められていたらいいなと思います：



この絵から何か感じていただけたらと思いますが、とにかく穏やかで優しい方であったとは思っています。あまり大声を出すこともなかったんじゃないかな：無駄に殴ったりもしない方であつたらうと・・・

もちろん、危険なことや何度注意しても直らないところについて、一発ガンといれて終わり！

そして、平林さんに山岸さんの最期の様子を伝えた茨城県在住の飛田さんが、戦いの詳細を文章にしてくださいました。僭

越ながら、私の拙いイラストを載せておりますので、状況を参照していただけますとわかりやすいかと思えます。

ちなみに、インターネットで「ホーネット 南太平洋海戦艦爆」などと検索しますと、元の写真が出てきます。

### 「ホーネットに魚雷を命中させた山岸一飛曹」

昭和十七年六月、山岸昌司一飛曹は筑波空教員から「翔鶴」乗組に転勤し、同艦飛行隊四二小隊二番機の操縦員として南太平洋海戦（昭和十七年十月二十六日）を迎えます。

乗機は九七式艦上攻撃機（以下「九七艦攻」と記述）一二型です。

そして、第一航空戦隊（以下「一航戦」と記述）第一次攻撃に参加しました。

その際、山岸機は敵空母ホーネットの右舷側を雷撃した翔鶴飛行隊長村田重治少佐（海兵五

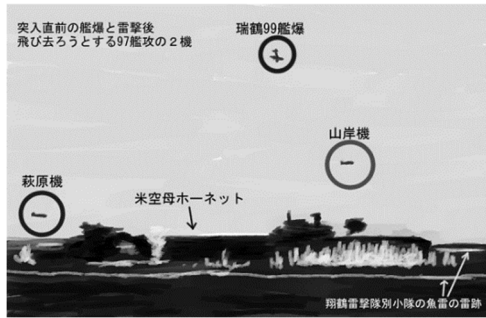
十八期）直率の第一中隊十一機の中の一機であり、第三小隊の二番機でした。

（正式には飛行隊四二小隊所属になるが攻撃隊編成時には、第一中隊第三小隊二番機となる。因みに第二中隊九機は分隊長鷺見五郎大尉（海兵六十五期）の指揮のもと、挟撃を企図してホーネットを左舷側から雷撃。惜しくも命中魚雷なし）。

この戦闘の状況は、山岸一飛曹が属した第一中隊第三小隊長機（二番機）の操縦員であった萩原末二氏（操三九「一飛曹」が、昭和三十一年に雑誌「丸」に寄稿した手記に克明に記されています）。

その手記によると小隊三機のうち、三番機は攻撃以前にグラマン（エンタープライズのVF10所属のF4F4と推定）に撃墜され、小隊長機と山岸機の二機がTF17（第十七任務部隊ホーネットを旗艦とする空母機動部隊）の輪型陣内での魚雷投下に成功した模様です。

さて、南太平洋海戦の劇的な瞬間を捉えた写真といえ、まづ想起されるのは例の九九式艦上爆撃機（以下「九九艦爆」と記述）突入の写真ではないでしょうか。



この写真には、ホーネットの艦橋に向かってほぼ垂直に降下して突入自爆せんとする九九艦爆一機のほか、雷撃を敢行する二機の七七艦攻が、明瞭に写っています。

この写真は、一九四二年の海

空戦の緊迫した状況を現代に伝える屈指の名写真とされます。そこで、先の萩原氏の手記ですが、実は・・・この著名な写真の状況と、実に酷似した内容が綴られているのです。

この事実から何が判明するのでしょうか？

結論から申せば、この写真に写る二機の九九艦攻は、魚雷の発射に成功した翔鶴第一中隊第三小队機（第四二小队機）であり、操縦桿を握っているのは、萩原氏自身と他ならぬ山岸一飛曹であるという事です。具体的に申せば、この写真の中で、ホーネットの飛行甲板上空を飛ぶのが山岸一飛曹操縦の二番機であり、同じくホーネットの側後方を低空で飛ぶのが萩原氏操縦の一番機であるという事が、断定可能と思われるのです。

なお、この写真は当時、ホーネットの右舷側に占位した重巡ペンサコーラ艦上から撮影され、この前後のシーンの写真も数葉現存しています。

では、戦闘の事実を裏付ける根拠として、米軍が撮影した一連の写真に符合する、第一中隊第三小队（四二小队）の行動を、萩原氏の手記から箇条書き的に①～⑥に分けて適記してみよう。

なお、参考として二葉の写真を模した富澤さんのイラストを掲げて頂きましたが、①②については上段のイラストを、③④⑤については下段のイラストをそれぞれご参照下さい。

① 小隊が射点に達する直前二番機である山岸機が一番機より前方を飛んでいた。

② ホーネットが、取り舵一杯の変針をした（第一・第二小队の魚雷を回避するためと思われる）ので、同艦のやや右舷前方から進入した小隊は、方位角が移動してしまった（その結果は写真に見る通り、後方からの近接雷撃になったと思われる）。

③ 自機の魚雷投下直後、萩原氏は前方に見えるホーネットの艦橋付近が爆発するのを目撃（本人は爆弾命中と記すが、この海戦でホーネットの艦橋付近の爆発は九九艦爆の突入によってのみ生じている）。

④ 一番機（萩原氏操縦）は避退する際ホーネットの右舷側を、低空を這い艦と平行するように飛行した。

⑤ 二番機（山岸機）は一番機の前方で魚雷投下を終え、ホーネット上空を飛び越えるも、バンクをした瞬間被弾し、反転してホーネット艦上に自爆を図ろうとしたが果たせず、海中に突入してしまった。

⑥ 一番機の偵察員（乙四 柴田飛曹長）と電信員（甲五 渡辺二飛曹）が、自機の魚雷命中を確認した。

では、写真との対比で①～⑥

の内容を考察してみましよう。

突入九九艦爆が降下するシーンを捉えた写真(上段イラスト)のホーネットは、艦尾波の長さから、三十ノット近い高速で航進中であり、しかも傾斜の状態から、左回頭(取り舵)中であると思われる。

この状態は萩原氏手記の②に符合します。よく見ると、この転舵で回避されたと思われる雷跡が、ホーネットの手前の海面に見えます。

④の状況は瑞鶴所属の九九艦爆がホーネットの煙突の一角に激突した時(下段イラスト)と考えて、ほぼ間違いないと思われます。

だから①のように、後方を飛んでいたのが一番機であろうと思われるのです。

何故なら、操縦していた萩原氏が、ホーネットの艦橋付近の爆発を目撃するのが可能な位置関係を考えるなら、後方の九七艦攻でなくてはならないからで

す。

ついでに付言するならば、この写真が撮影される数秒前に、山岸機と思われる前方の九七艦攻が魚雷を投下しています。

投下された魚雷は、投下機を凌ぐ速度で若干前方へ向かって飛翔した後、海面に射入します。

写真(上段イラスト)の中でホーネットの艦尾付近に白い濛気が見えますが、海面の射入痕から立ち上がった水柱が、消えようとしている状態です。

山岸機の近接発射の実情を示しています。

この写真に連続したショット(下段イラスト)は、ご覧になった方も多いでしょう。

ホーネットの艦橋から九九艦爆突入の爆炎が上がるシーンです。

突入機は一旦ホーネットの煙突の左前方角に激突した後、艦橋横の飛行甲板に落下しました。艦爆の搭載燃料が凄まじい爆発



を起こした状況を写真は伝えています。

一方、二機の艦攻はどうしたかという点、写真の右端に、低空をホーネットと平行して飛び、それを追い越した一機が見えます。

これはまさに④の状況にほかなりません。こうして避退したのが、萩原氏操縦の一番機です。

一方、山岸一飛曹の二番機の姿は、ホーネットの艦首のやや前上方に認められます。

この写真の、原版に近いコピーを見ると、この機体は被弾による黒煙らしいものを引いており、ホーネットに向けて降下中のように見えます。これが⑤の状況です。

さらに、⑥につながる状況が、米側の記録で証明されます。

米海軍が認めた、南太平洋海戦でホーネットが喫した航空魚雷は三本。

うち一航戦第一次攻撃によるものは、右舷のほぼ中央部に一本と、同じく右舷後部に一本の計二本です。

驚くほかはないのですが、米側は以下の事実を記録しています。

一本目の魚雷が中央部に命中したのが、艦爆機が突入した約三十秒後、後部への二本目がその二十秒後(艦爆突入から約五十秒後)であるということです。

タイミングから判断して、これはまさに四二小隊の二機が放った魚雷が命中したとしか思われません。

米側の記述によると、村田中隊(第一中隊)の右舷への雷撃は、三つの小隊の順撃によって行われたと思われます。

そのうち、ホーネットに向かって発射された魚雷は一個小隊二本づつ、計六本です。

さらに、米側の記録から判断すると、この六本のうち、最初の小隊(指揮小隊三機、村田少佐操縦の一番機はF4Fとの空戦で被弾、速度が落ちたところで対空砲火に斃れた模様、同機の魚雷発射は確認できない)の二本は艦首をかすめ、次の小隊(第二小隊 海兵六七期 鈴木中尉指揮の二機)の二本は発射過早のため、転舵によって容易に避けられた事が伺えます。

このように、ホーネットは右舷側から接近した四本の魚雷を、高速と巧みな操艦でまずかわしたのです。

ならば、残るもうひとつの小隊、すなわち第三小隊(四二小隊)が、最後に後方から発射した二本が、ホーネットに命中したのは歴然です。⑥の記述通りです。

残念ながら、ミッドウェー海戦でヨータウンを撮った時とは異なり、ペンサコーラのカメラマンは、ホーネット被雷の瞬間を撮影してはおりません。

ペンサコーラが四二小隊に続く四九小隊(第一中隊第四小隊の二機)に攻撃され、急転舵したため、動揺著しかった故と思われます。

この四九小隊の雷撃を以て、第一中隊の攻撃は終了しました。

ホーネットの中央部に命中した一本目の九一式改三魚雷による爆発は、四層に設けられた水中防弾隔壁をぶち破り、破口からの浸水効果で、前部機械室を満水状態にし、さらに隣接する後部機械室や一部ポイラー室の床上まで、大量の海水を躍り込ませて、それらを全て稼働不能にさせました。

機械室とはエンジンルームです。

その内部には、全長二百五十メートル、二万五千トンの艦体を、三十ノット以上の高速で航進させる動力源、十二万馬力の蒸気タービンが据えられています。

その機能が、わずか一本の魚雷による浸水で、完全に喪失させられてしまったのです。

ホーネットは、航行不能となりました。

その二十秒後に後部に命中した二本目の魚雷は、いわばだめ押しの破壊力を発揮し、その爆発の衝撃で、舵故障を起こさせました。

空母の巨大な一枚舵は、左三十分で停止したまま動かなくなりました。

まさに、ホーネットの死命を制したのは、四二小隊の二機が発射した二本の魚雷であったのです。

ホーネットの転舵で、射点はやや後落しそなのを素早く判

断したものか、四二小隊の二機は思い切った近接発射を行い、それが奏功したと思われます。

中でも、山岸一飛曹の必中への執念は凄まじく、一番機よりも先行し、さらに踏み込んで雷撃を敢行しました。

また、「予科練外史(四)」に山岸機の雷撃行動を目撃した四二小隊三番機の電信員、萩谷三飛曹(乙九)の証言があります。

それによると、山岸機は魚雷投下直前に機を左側(ホーネット側)に切り返したそうです。

これは、ホーネットの転舵によって刻々と広がる方位角(やがて乗機と敵艦の進路が平行になれば射線が目標を捉えられず、魚雷は命中しない)を修正しようとしたためだと推定されますが、極めて大胆な行動と言えます。

何故なら、切り返すには機翼を傾けねばならず、その際海面との接触を避けるために、やや高度を上げねばなりません。そうなれば、艦側の猛射を浴

びる事は必至であるからです。  
いわば、捨身の行動とも言え  
ましょう。

この凄絶な突撃により山岸機  
の魚雷は射距離を詰めた分、萩  
原機の魚雷より、目標到達が早  
かったと推測出来ます。

故に、ホーネットのど真ん中  
に当たった一本目の魚雷が、山  
岸機のものである蓋然性は、極  
めて高いと思われます。

山岸一飛曹は、自らの放った  
魚雷の行方を、我が眼で確認し  
たかった（ペアが負傷あるいは  
戦死していた可能性あり）ので  
しょうか？

その為に、機を傾け、操縦席  
から後方を振り返ったのかもし  
れません。

そのバンクの刹那、不幸敵の  
命中弾により、機は発火してし  
まいます。

咄嗟に：彼はホーネットへの  
体当たり自爆を決意：というよ  
りも反射的に機をホーネットに  
向けて反転させます。

攻撃機搭乗員としての日頃の

覚悟がそうさせたのでしよう。

この壮烈極まる覚悟は当時、  
同乗のペアも共有していたはず  
です。

この覚悟とその振る舞い、先  
の九九艦爆の搭乗員に対しても  
同様ですが、後世に生きる私は、  
ただただ瞠目し、頭を垂れるの  
みです。

米側の目撃談によれば、この  
時、ホーネットに突入しようと  
した山岸機は、激しく自転しな  
がら海中に落下したとのこと：  
嗚呼。

F4Fの執拗な襲撃に耐え、  
輪型陣の十字砲火を冒して突進  
しながら、高速で回避する敵艦  
を照準する：この極めて困難な  
雷撃行を達成した山岸一飛曹。

惜しむらくは、魚雷命中の瞬  
間を網膜に宿すことなく逝きま  
した：享年二十二歳。

しかしながら、その行動は勇  
敢の一語に尽き、その最期は後  
に言う：「雷撃精神」を真に体  
現したものと伝えましよう。

（飛田伸二さんの著書から引

用させていただきました。）



乙種海軍飛行予科練習生第六期

海軍飛行兵曹長

故 山岸 昌司

長野県大町出身

空母「翔鶴」乗組員として、南太平  
洋海戦に参戦、昭和十七年十月二十  
六日敵空母ホーネットを攻撃中に被  
弾戦死

されるまでが書かれています。

日本のため、戦い、守り、命  
を落とされた飛行機乗りの全て  
の日本男子たちのご冥福を、心  
からお祈りいたします。

そして、とても素敵な姪御さ  
んと出会わせてくださって“ど  
うもありがとう山岸さん”。

どうかどうか、これからもこ  
の国を見守っていてください。

（終わり）

この内容の詳細については、

「母艦航空隊」（潮書房光人社）

の、萩原末二さんの項、「南太平  
洋海戦での戦い」に掲載されて  
います。この日の攻撃の最初か

ら、萩原さんらが駆逐艦に救出